

●事例紹介●

大学の品格

～大学生の心の発達とハラスメント問題～

道又 紀子

(東京工業大学客員助教授)

はじめに

大学はその役割を大きく変えつつある。筆者は、大学のカウンセラーとして二〇年近く勤務している。この間、進学率が高まり、多様な背景をもった学生が入学してくるようになった。理工系の大学院でも様々な国籍・人種の学生が入学して来るようになり、少数派であった女子学生の進学率も高くなってきている。そのような変化は、本来中心となっていた学生達からは、異文化との出会いであるともいえるし、このような多様な背景を持った人への配慮が必要とされてきていると言えよう。

この二〇年の中で大きく変わったことの一つに、各大学が対応するよう義務づけられた、「ハラスメント対策」が挙げられる。前述の状況からみて、この対策の出現は必須であっ

たとも言える。大学でのハラスメント問題の取り扱い方は、まさに大学の良心・道徳性・品格が問われる問題である。筆者は、この相談窓口ができてから、カウンセラーの他にハラスメント相談員を兼務している。今回は、学生相談のカウンセラーから見たハラスメント問題を、学生のこころの発達という点から記してみたい。

一 ハラスメント問題の取り扱われ方

一九九九年文部科学省規定に基づき、各大学にセクシユアル・ハラスメントの相談窓口ができて七年が過ぎようとしている。毎年文部科学省主催の「国立学校等セクシユアル・ハラスメント防止等研修会」に参加してきた。その年々で工夫を凝らした演目がならび、それに相応しい演者の話があり、示唆にとんだ内容となっている。また、育児休暇をとった男

性教員の例が紹介されたりといったように、先駆的な対策をとっている大学の例が紹介され、大学に持ち帰る新たな目標を与えられる場でもあった。

この研修会の初期には、これまでの相談事業でどれだけ相談件数があり、窓口でどのような混乱が起きたのかといった報告があった。一般社会と比較して、大学においてはこの問題の理解が十分進んでいないこと、特に教員を対象とした啓発活動をしていくべきであるという指摘があった。全国の窓口で「これはセクシュアル・ハラスメントである」「いやそんなつもりはない」という混乱が起きたようである。これに対して、たとえ加害的立場にある人にどのような意図があるにしても、相手に不快を与え、それによって仕事や就学に支障をきたしていたら、それはハラスメントになり、注意や処罰の対象となるという説明があった。

二〇〇二年の研修会では、被害者の権利回復と二次的加害（セカンド・ハラスメント）が演目となった。二次的加害とは、被害を受けたことを相談したり訴え出したことにより、非難されたり、不利な取り扱いを受けることを指している。二次的加害により、被害者をさらに傷つけるような対応や発言がなされないように注意が喚起された。これを受けて、「不利益取り扱いは禁止」という項目を設けて、二次的加害を行わないよう規則やガイドラインに明記する大学も多くなってきた。さらに誰かを意図的に陥れるため、嘘の訴えを起

こすようなことがないよう「虚偽申し立ての禁止」をガイドラインに盛り込む大学も出てきている。

このように、現実に相談事業が展開する中で、少しずつ各大学の規則やガイドラインにも変化がみられた。本学では二〇〇四年から窓口は、ハラスメント問題全般を扱うこととなった。これにより、大学は教育場におけるいじめや嫌がらせ、不当な扱いの全般について留意することとなった。このように、被害者の痛みやそれを解決しようとする人達の多大な努力によって、この事業は発展してきていると言える。

二 学生の成長という観点からの問題

この相談事業に相談員として関わって感じることであるが、カウンセラーとハラスメント相談員の役割は異質である。ハラスメント相談員の役割は、被害的立場の方の話を、なるべく偏見をなくして伺い、考える学内外の対応をガイドすることから始まる。その後、相手の必要に応じて、相談だけで終わる場合もあるし、調査委員会に書類をあげる役割をになう場合もある。

一方、カウンセリングは、主に本人の成長を第一の目標としてクライアントにかかわっていく。また大学のカウンセラーは、個人の成長を促進するような大学内の環境整備や人間理解を深めるかわりを、各種会議や授業、オリエンテーション等を通じて行っていく。

そのような立場にある学生相談のカウンセラーとして、改めて感じていることを記してみたい。

① 自分の感じていることを表現するスキル

様々な訴えは、それが上手く表現できていないことから生じている。勿論、大学という上下関係のはっきりした世界の中で声を上げづらいこと、研究室の持つ閉鎖性が、それを表現しづらくしているのは間違いない。その上で、自分が感じている不快感を押し込めて、感じなくしていることが、様々な精神的身体的苦痛や症状に結びついていることも相談を受けていて実感する。どこかで、不愉快な感覚をも大切にしながらそれが生じているのか、立ち止まる時間を持つことの必要性を感じる。被害を深刻にした後に、やむなく訴えを起すことやその後を生じるリスクを考えると、この初期の段階での不快への気づきの大切さを感じる。そして、教育の中で、NOと言うことを伝える様々なバリエーションを教えていく機会を持つことの必要性を感じる。悪徳商法・しつこいクラブ勧誘等、大学生が上手くNOを表現できることは、学生生活を健康に、そして安全に過ごすためには必須である。

② いじめの問題

ハラスメント相談の対応の中で、学生と学生の間で起きるいじめや嫌がらせの問題がある。学生間のトラブルへの対応の難しい点は、実態の把握の難しさと学生間の関係の複雑さにある。また、審議・調査中のそれぞれの学生の学ぶ権利を

どのように守るのかという点も重要である。

学生間のアカデミック・ハラスメントの背景には、当然のことながら、小・中・高のいじめの問題との深いつながりを感じている。大学院生と過去のいじめの問題とのかかわりについて、深い論考や研究があるわけではないが、大学生以上の心性の中に、仲間同士のいじめの問題が少なからず影響を及ぼしていることを実感している。

筆者がある大学の教職課程の授業でレポートを課した際、教育に関して自発的にテーマを選んでもらったところ、約半数の学生がいじめの問題をとりあげてきた。ほとんどの学生が自分や自分の周囲でおきた体験を、まだ自分の中で解決できない問題としてレポートしてきたことに驚かされた。

はつきりした因果関係が分かるものではなく、娯楽やゲームとしてのいじめを体験をした学生やそれを今まで誰にも言えずにきている学生も多数存在した。たとえば、ある日突然クラスの全員が自分を無視するようになる。愕然として理由を考えるがわからない。ひとり孤独を深めているとある日突然それが止む。

何事もなかったかのように「次は、〇〇さんを見無視するから一緒にやろう」ともちかけられる。しかし、もう人を信じることも、それに加わることも嫌になり、こころを閉ざしたまま、今日まで生きてきたという事例も複数みられた。このようになんの理由もなく、娯楽としてのいじめが人を生死に

かかわるまで深刻な状態に陥れている。また、これらの学生とは違い、やられるよりは早くする側にまわって、自分への被害を防ぐという、やりきれない連鎖を生んでいる事例もみられる。残念ながら大学にもこの問題が持ち越され、ハラスメント相談窓口を訪れることがある。「若者のいじめの問題は、テレビなどで必要以上に人をいじめて笑いをとる風潮や、報道によるいじめ等、大人の社会が持っている問題に「関係する」という学生の分析もうなずけるものがある。

③ 異性や異質な文化への配慮

アカデミック・ハラスメントの訴えの中には、研究室に一人だけ入ってきた女子学生への配慮のなさが多く見られる。その根底には、明らかに異性に接したことの少なさ、少数派への配慮のなさといった問題がある。

異性への配慮・違った文化への配慮を、大学生もまた入学初期のうちに学ぶ必要がある。特に理工系では、女子学生の数は男子学生に比べ圧倒的に少ない。特に中学・高校と男子校、女子校で過ごしてきた学生達は、異性と教育の場でお互いを理解するチャンスが少なかつたため、大学の研究室に配属になって、初めて密なかかわりをもつというケースも多い。残念ながら、「相手の容姿をあげつらつて馬鹿にしたりしてはいけない」といった初歩的なマナーもまだできていない学生がおり、それに傷つき登校できなくなる女子学生の被害も存在する。

人権や異質な文化への配慮、異性への配慮についてのビデオを作成し、入学後のマナーを教育する大学も出てきていると聞く。研究室に入るにあたってのマナーをあらためて伝える必要性を感じている。

世界に通用する人物について、藤原^①は、「美しい情緒性」が重要であり、「弱い者へ思いをはせる想像力」の大切さをあげている。国際人という用語がすべてのように思われがちだが、国際社会の中で真に人が尊ばれるのは、高い道徳性を身につけた時であるという。世界に通用する学問や研究者の育成を目指していくのであれば、この道徳性の問題を今一度十分認識し、学生を育てていく必要があるといえる。

④ 自己紹介のない授業・目を合わせない教師

様々な大学で学生相談にたずさわってきた。どの大学でも聞かれる新入生の話に、「自己紹介なしで、いきなり授業をする先生は嫌だ。あれは何者なのだろう」「僕たちを絶対見ない。僕たちのちよつと上の空間を見て話している。きつと自分たちのことが嫌なのだろう」というものがある。

コミュニケーションの最初の作業がなされていない、いきなり何の前ぶれもなく教員を訴えてくる学生や保護者に出会うことも多い。話し合いなどこの世に存在しないかのような気にさせられる場合もある。自己紹介のない専門知識の洪水の中で、話し合いなど必要ない、嫌なら訴えるまでだという悲しい断絶が生まれる土壌を見る思いがする。

「自己紹介をする」「授業のオリエンテーションをする」

「学生と目を合わせる」といったことがなくなってしまう背景には、授業中の学生の聞く態度の悪さに失望し、それを見ないようにして過^②しているという教員もいるのかもしれない。教員の傷つきが学生への拒絶の姿勢を生んでいるのなら、これへの対策も必要であると思う。

以上の四つをまとめるならば、学生・教師・日本社会全般にみられるコミュニケーション能力のつたなさを、今後いかに改善してゆくのが、ハラスメント問題の解決に大きく影響しているといえる。

おわりに

娘が中学生になった時、教科ごとに先生が替わることにわくわくしていた。「今日はこんな先生だったよ」と毎日楽しそうに報告してくれた。ある日、「今日の先生はいきなり黒板に何か書きながら授業した。あの人の名前はなんというのだろう?」と悲しそうにしていた。中学生にとっても、この最初のコンタクトは重要なのだ。

ある日「凄^③い先生に会ったよ!」と興奮しながら娘は帰ってきた。娘の話によると、その二〇代の先生は、小児ガンで余命数日といわれてこの世に生を受けたそうである。長い年月が流れ、先生は生き延びた。大学で博士号も取得したそうである。二〇歳になった時、先生の入院していた病棟で、成人式をしてくれたそうである。

行ってみると、その当時入院していた三〇人あまりの席が用意してあったが、生き延びたのはその先生一人だった。三〇あまりの椅子には、それぞれに花束が置かれていた。子を亡くした親達が集って、我が子のその後を伝えてくれたそうである。娘は、その中で「生きたい、生きたい」と言いながら亡くなっていったという一六歳の少女の話がとても胸に響いた様子だった。「三〇人で、ちよつとこのクラスぐらいだよ。このクラス全員ぐらいの同級生が死んでしまったのだ。僕も、歩けなくなりですよ、足が動かなくなりですよ」と言われた。でもほら、ちゃんと動くよ!」と力強く足を動かしてくれたそうだ。短い自己紹介の中で、「命」「生きていくこと」をこゝまで鮮烈に伝えてくれた先生に出会えたことに、親として感謝の言葉もない。

教育における「品格」、すなわち美しい情緒性、人が自然と寄っていきたくなくなるなにか、について深く考えざるを得ない。すばらしい先生も学生と目を合わせない先生も、かつては新入生として、ドキドキしながら大学の門をくぐったにちがいない。教育とは、人間の相互関係を通じてしかなされるものであり、それを成功させるかどうかは、個人の道徳性・情緒性によって支えられている。

「大学の品格とは」という命題を心におきつつ仕事をしていきたい、と願う。

【参考文献】(一)藤原正彦、二〇〇六、国家の品格、新潮新書